



本朝弓馬要覽

貳

ケ 5
95
2





大坪本流武馬必用卷之三

禮馬 目録

- 一 白馬の薙會の事
- 一 正月家初の事
- 一 儀飾座敷物飾の事
- 一 前並後並七飾の事
- 一 馬道具の六筋の事
- 一 御侍門の事
- 一 御座の禮の事
- 一 御座の儀の事



武馬必用卷之三



暮月つゆづきの打うりしりす

女に年ねんのの人ひとるる事こと

流なが滴た馬ま乃の事こと

半はん遊ゆうのの事こと

笠かさ急いそけけ事こと

草くさ麻ま乃の事こと

八はち的てきのの事こと

校がう抄しやう乃の事こと

競けい馬ば乃の事こと

数かず乃の事こと

騎き馬ば持もち無む事こと

乃の性せい乃の事こと

庭てい乃の事こと

乃の場ば乃の事こと

乃の建けん乃の事こと

乃の事こと

乃の事こと

乃の事こと

乃の事こと







と改めよ下と意一。兼とてそのゆく。六合  
 とお拂ひ。此乃と返馳七返。兼初の地乃二返。初  
 合十二返のり。又同年の家初。二乃の勢あり。  
 初輪と返き。陽と返とへ。その後陰陽は  
 出とるり。兼人のも兼のめの方へ向て。大  
 兼神。御年神并よ。守の神と海し。祝詞  
 して。そそ陽はひひて。兼おし。細り。何と陽  
 は向く。兼のり。也して。兼初よき。武法もて  
 兼り。守わり。忌事わり。口傳  
 一 大乃ありて。馬よ。ここの勝り。ありと。つ。六。傳

兼唐兼袖兼の事あり。も勝つよの具よ。お  
 乃ありひわり

- 一 一よ七勝とつ。お中へ。兼よ七口兼の傳わり。も  
 も大乃あり。儀武のり。お返は返よ。見ん  
 兼とを。お軍家おて。お返の勝り。見ひ。方中よ。云  
 一 以。總。雲。敷。揚。蝶。李。兼。八。乃。子。の。致。大。滑。子。小。決  
 子の傳わり。く。わり。こ。も。も。あり
- 一 兼佛の門。お兼。初。わり。も。人。兼。人の。御。兼。兼  
 法わり。見ん。兼。の。兼。う。も。も。あり
- 一 兼人。兼。人の。ほ。兼。兼。ゆ。て。傳。わり。も。も。兼。の



礼わり。又いさかのな。ふらん。とわり。つら。と。禮の  
れあり。

一 子孫あり。と。上。下。の礼あり。孫  
の礼あり。

一 墓。同。の。子。孫。あり。君。非。君。の。武。法。あり。  
衆。人。の。衆。衆。あり。子。孫。の。金。錢。あり。諸。皆。を

よ。分。わり。教。の。信。之。外。に。あ。る。よ。は。信。わ。り。を  
衆。衆。の。よ。信。之。の。あり。

一 少年。の。人。の。衆。衆。は。武。法。あり。元。衆。の。人。は  
信。之。あり。又。衆。衆。の。衆。衆。は。衆。衆。の。衆。衆。

云の。の。衆。衆。あり。衆。衆。と。あり。事。あり。と。武  
法。礼。教。は。信。之。の。あり。

一 流。滴。る。を。天。武。天。皇。の。所。に。盛。は。信。之。ま  
あり。この。信。之。衆。衆。の。中。は。衆。衆。の。あり。

信。天。皇。を。衆。衆。の。あり。と。信。之。の  
あり。ち。の。の。は。衆。衆。と。あり。衆。衆。と。は。流。滴

る。衆。衆。の。の。の。的。と。も。あり。と。信。之。の  
と。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。

何。と。し。て。今。を。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。  
と。衆。衆。の。衆。衆。と。衆。衆。の。衆。衆。の。衆。衆。











のこら成射あり。射の後負りて中氏  
こまうふおんとする。後射の訓一ありし。  
又ゆばハのましく射るといなり

一 投物を一嘉四弁也。後射のた切ありては  
中とあひせらる。を投物の形を四弁と  
九まといありのも半はんとましく馬上  
より射りて。四弁を八寸の形をといは  
切。中にて投てまらるなり。あらぬを四  
四弁とましく九まとは九のよ松と刺とを  
一とましく射りまらる。板の善は切自

と有りて矢中らとまらる。板射研らそよあを  
中あり。あまら射ありは中とわらる  
後射あり。世よこそ九のよ投といはは  
魏馬を古代の。後射あり。漢小荆楚  
射紀よまら。後よ礼儀中礼及楚  
式よせらる。大内ありては月又日  
あつた。今まらる。か  
所法乃中。あつた。か  
そあつた。あつた。あつた。  
る二とたあまらる。後射とわらる



けあるのり。そま武は佐持わく。進揚わ  
 なるのわわく。えん人功而おわくまして  
 き。揚とまげごう。あ人の第まこのの侍  
 扱わく。競ふと例！。競ふと例より付  
 二つの男のわく

呼のうら競る物の揚まけを

まい男女の被ふとく。競ふはあま  
 中わく。今まあ流はゆして。あ乃代  
 扱とはよりまのく

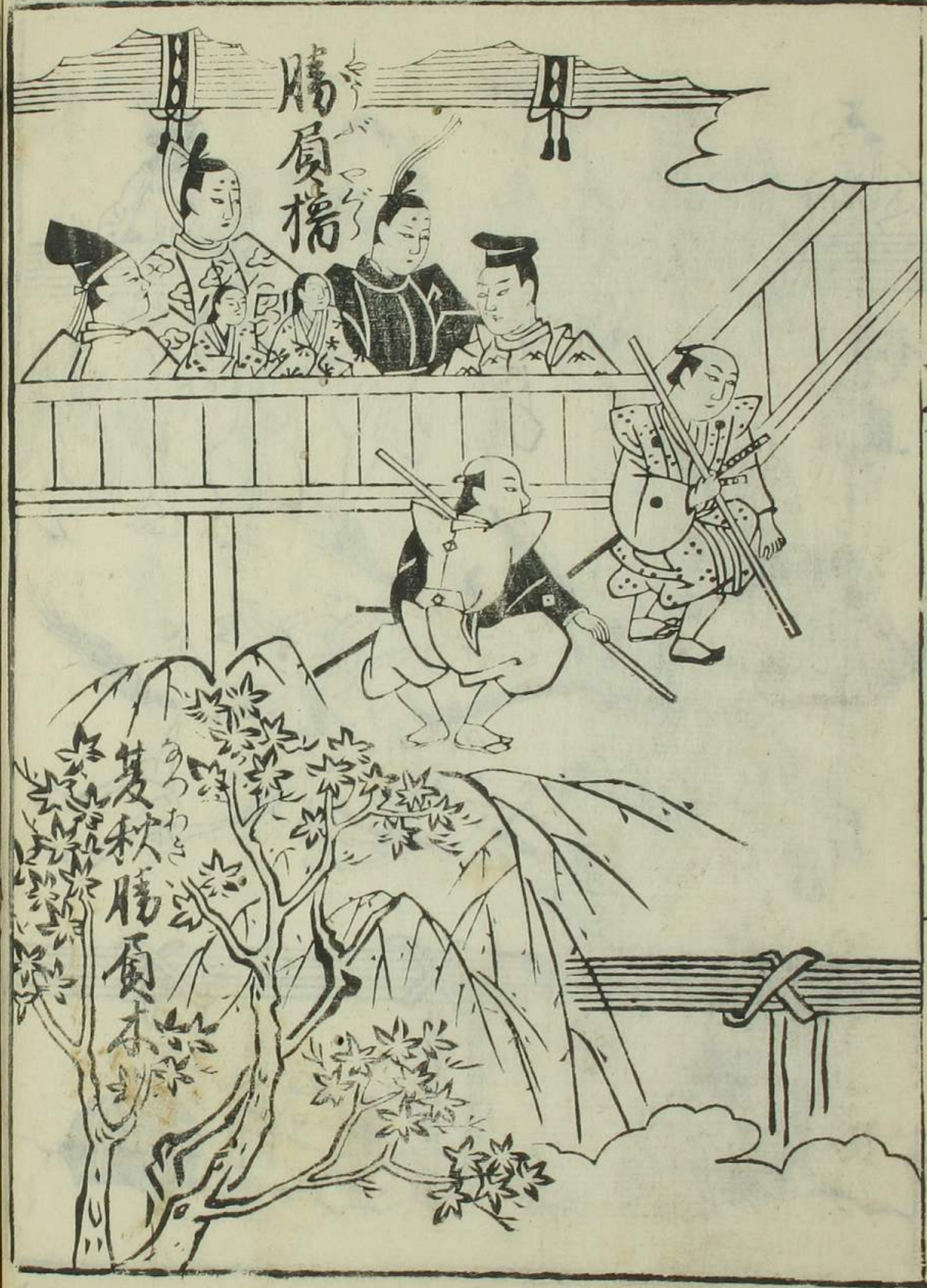


競馬

武馬卷之三

十





一 兼の位立物あり。天比乃兼。陰陽の  
 兼。六真の兼。三武乃兼。柘原兼。南天  
 乃兼。梅の兼。右乃兼。捨見乃兼。村の  
 の兼。皆相の兼。入相の兼。田原の兼。思  
 しく敬あそ。とくいつげ。終くそ切と云  
 傳あり。美敬を。相行と可とす。此は加  
 ぞく。己長。相よ切あり。條と口傳  
 一 騎る。相無。仕傳あり。結の。相。よ。其の  
 可。の。あり。武士の。軍に。趣。吉。例。乃。具  
 と。し。て。右。祝。行。乃。傳。あり。騎。る。相。無。仕



立ねわり。んまい。か。あ。わ。り。ぬ。く。さ。い。ん  
け。わ。り

一 仰式の時を。その時は。怒して。驚か  
か。よ。それ。く。の。仕。急。わ。り。ま。い。て。は  
良。口。中。急。の時。を。あ。ら。わ。て。一。切。の。事。具。は  
傳。え。わ。り。ア。ぬ。ぐ。

一 同季ふらりて。いつく。あ。わ。り。ま。い。ら  
振。込。妙。し。な。い。柳。と。枝。し。梅。の。根。と。の  
く。し。冬。の。松。と。の。け。て。あ。と。知。ら。り。し。  
それ。ど。い。ま。あ。て。し。花。し。つ。ま。い。鳴。と。響。と

指。よ。の。ら。り。ら。ん。時。を。松。柳。と。の。け。て。冬  
ま。と。ア。ぬ。く。ま。ら。り。し。な。い。の。ら。ん。乃  
あ。わ。ら。ぬ。柳。と。の。け。て。ま。あ。よ。あ。え。く  
く。ま。ら。り。し。と。ら。り。し。ま。い。秋。の。庭  
も。冬。の。庭。と。あ。り。し。あ。ら。ん。ち。見。乃。庭  
と。て。同。季。の。境。の。あ。わ。り。わ。り

一 庭あよき。あ。り。て。武。法。の。ま。い。中。の。り。  
の。あ。り。の。東。士。の。並。掛。小。串。八。的。の。お。お。庭  
あ。ら。り。し。ま。の。怒。り。し。て。あ。よ。わ。ら。び。と  
ゆ。ゆ。く。秘。伝。の。庭。あ。ら。り。の。庭。軍。陣。の。庭











一 武法始く歴入つるふき言わつたに今  
又武法わり

一 武場宗歴宗の武法わり。歴去おしあり  
申す。友宗授人。まゝなるにと宗歴の  
先教と宗とと又歴宗の武法わりを  
とてあり

一 武中と歴と時と。武中歴まつる。武大  
の宗歴宗は宗歴あり申す。武法  
武拾のきよ。つまのしと  
一 先生のしと。孔教とありと。武教

一 武中。軍教とあり。武中歴まつる。武大  
の宗歴宗は宗歴あり申す。武法  
武拾のきよ。つまのしと

一 武中歴まつる。武大の宗歴宗は宗歴あり申す。武法  
武拾のきよ。つまのしと  
一 先生のしと。孔教とありと。武教

武中歴まつる

七







一切折きまゝのひてゆりまゝと月。隣に  
 まゝのひて。わらわらあるはす  
 自由と穢れ。苗世と人。多し。盡  
 わいさしひひしてわらわら中。唯緒  
 子孫不くと人

大塚中流或馬必用巻之目

相馬 目録

- 一 毛老氏いびとの事 附 昭野の事
- 一 軍の事 小塚の事 色わりの事
- 一 志願もろお氏知の事
- 一 相令の事 氏知の事
- 一 目の内わく 後書と知の事
- 一 口の内わく 後書と知の事
- 一 身の内わく 後書と知の事
- 一 音の事 氏知の事









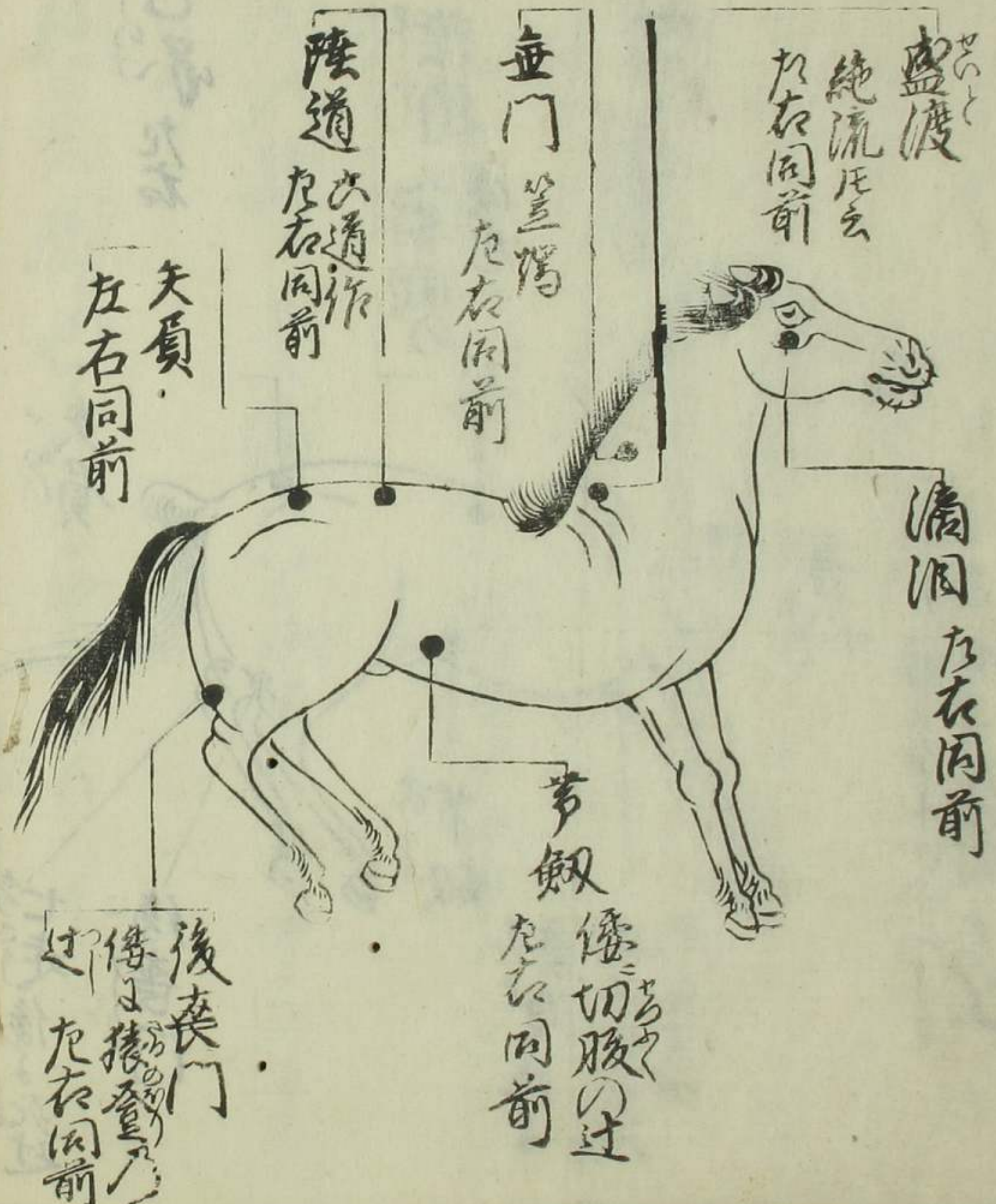












身よりとあらへし。又身よりとあらへし。おちを授け  
 と駿より。取緩みし。ゆる廣きとゆるや  
 切より。中あつる身より。相容の奇よ。  
 目を清く。耳をみし。口をさく  
 心よりと。縁とあらへし。  
 一頭長く。胸浩く。と肩あがり。下着長く。上胸  
 狭く。下腹長く。お長あり。船底より。行  
 役く。船ひりく。生よりとよる。とあらへし。  
 頭より。胸より。かくまへ。せまき  
 船のせり。とき。表あり。りり

古馬卷之四



相取五つ乃位乃事

- 一 面の内とて眼の事
- 一 肩の内とて之取骨并膝曲遠の事
- 一 胸の内とて御衣下の事
- 一 腰乃内とて股より下の事
- 一 甲斐の内とて御符の事
- 一 志みの内とて後代ゆく御符さしひり事
- 一 相客乃並一より
- 一 菊流乃相取を母麻の巻十字海麩茶
- 一 條之持乃色地籠下の色地籠迄とて

大なると共しよて急くるもの故に正邪の生  
 じしむまて家の傍とあとの事意之  
 一 或るや相とり人の公物の名をお客の御と  
 つらおき之をのまの風俗と知りとのりく  
 せしん大明相解のまのおとそめは天竺乃  
 るの取客さあめのとてつらつらとて  
 相和物のまは目利はあつ事よとて度書  
 の目よりまのおつらとてはえとて書物とて  
 法書也一の秘書とす又は人籠乃目取  
 御衣とてとすすつらとて秘奥とすとて書と



名れど、疎陀、疎陀乃、麴、氏、を、く、修、う、る、也、之、  
 世、り、よ、疎、陀、疎、陀、を、の、り、也、人、を、修、う、る、也、  
 一、つ、り、精、氣、皆、い、つ、つ、と、あり、て、ら、り、唯、人、を、修、  
 然、の、り、氏、ち、り、て、お、と、孫、み、う、と、い、え、お、人、の、  
 修、也、も、い、つ、つ、と、新、て、遠、く、は、修、る、者、を、  
 て、功、の、一、遠、と、い、つ、つ、と、修、る、者、を、  
 供、し、て、終、わ、り、と、い、つ、つ、と、  
 一、或、書、と、ん、と、い、た、百、の、の、母、と、名、を、  
 の、も、多、く、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 下、の、也、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、

かん、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 百、の、の、修、る、者、を、  
 一、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 超、う、る、名、の、修、る、者、を、  
 一、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 本、色、を、わ、り、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 本、性、を、わ、り、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 精、色、を、わ、り、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、  
 精、色、を、わ、り、と、い、つ、つ、と、い、つ、つ、と、

















布列山

一 畜世を物めりて成地物くえてさうり小車。  
 馬あつるふあり。あつる。物めりて成地物くえてさうり小車。  
 大切ありて。物めりて成地物くえてさうり小車。  
 総てあつると又まふ物造の一馬あつる。布列山  
 の御物の物めりて成地物くえてさうり小車。  
 物めりて成地物くえてさうり小車。  
 布列山。物めりて成地物くえてさうり小車。  
 物めりて成地物くえてさうり小車。  
 又物造り。物めりて成地物くえてさうり小車。

武馬卷之四

十四





望月の夜

わび



相坂の雲乃岩と踏み〜

羽さちの心影糸乃駒

子馬のまじり半そ。心せましくあひ

ゆきとく。生捨る。南船の牧らり出

探る。下総乃物らりおまへ〜

一世よ人の馬まわり。ま人のままのし

ゆき。我子置とら〜るまを捨あ〜

経典とれ〜くまの事あ〜んより〜

ゆき。又ま人のしるま。を子置乃らひ

馬馬史記







こまりずるもの数車よりの一紐とを  
まゝ賜ともお文あもりると  
す

大坪中流式馬必用巻之五

醫馬 目錄

- 一 醫馬の監觸 附 伯系流流の傳記
- 一 健る形状乃事
- 一 脈色の事
- 一 色脈乃事
- 一 上六脈下六脈の事
- 一 又運無体の事
- 一 二乃乃事
- 一 陰陽並塵の事

大坪中流式馬必用巻之五



一 七傷八邪の事

一 又骨乃の事

一 又脈又愈れり

一 口色はんく回季王分の病は知る事

一 點痛の中

一 七筒乃を懸懸の中

一 十二經絡の中

一 針灸傳の事

一 長初血はみり乃理れ事

一 くらじの汁の經代知る事

一 子醫と撰治理の事

一 傷氏性物敷の事

一 消黄敷の事

一 愈相葉の事

一 強き傷葉強定葉は月らる事

一 内死らるるの中

一 同葉乃の事

一 色生葉の事

一 たいんの説乃の事

一 子転命日の事







*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

大坪中流或馬必用巻之五

東茂

藤藤定易彙編

一 醫<sup>イ</sup>政<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>業<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>こと<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>時<sup>シ</sup>  
さ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>。英<sup>イ</sup>國<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>業<sup>シ</sup>仲<sup>シ</sup>約<sup>シ</sup>より<sup>シ</sup>衛<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>  
始<sup>シ</sup>より<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>始<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>より<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>  
所<sup>シ</sup>望<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。生<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>こと<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>さ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>  
夫<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>。道<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>政<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
せ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。傷<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>己<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>業<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>より<sup>シ</sup>起<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>  
乃<sup>シ</sup>夫<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>こと<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>。伯<sup>シ</sup>夷<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>孫<sup>シ</sup>湯<sup>シ</sup>  
の<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>望<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>流<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>望<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>。醫<sup>シ</sup>政<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>







三ありつみとありよしくおぼく療治と  
あす人さ事あり

一 健るる疾あり。お眼遠く照りかたき

てうゆるしく鼻息短利あり。鼻息短

よく。呼吸急うしく。口中を食うものよ。枕

灸のつらのでしく。首尾と動し。船は氏

きうくものつらうく。尿濁りて急うく

鬱滞しく。精神惛索て。脈平あり。健る

と知し

一 するの脈き。二関之処と編て。あね成ううかみ

まのあり。又たの脇のり成るで押してを脈あり

より来し。肺心肝の脈あり。あ後より来

らる。脾胃の脈あり。初てとす法くうご

とく。ありと。死とべし。右の方。脈と押

は。鬱滞を漏る。十死一生存と知し。緩やうよ

おさる。心脈あり。紫のす。うりしくありと

肝脈あり。細くして。寒さ。やうよ。印くは

胃脈あり。ちりくとあ。でうりしく或る。

津液。さうらうりしく。ありと。脾胃あり。あ

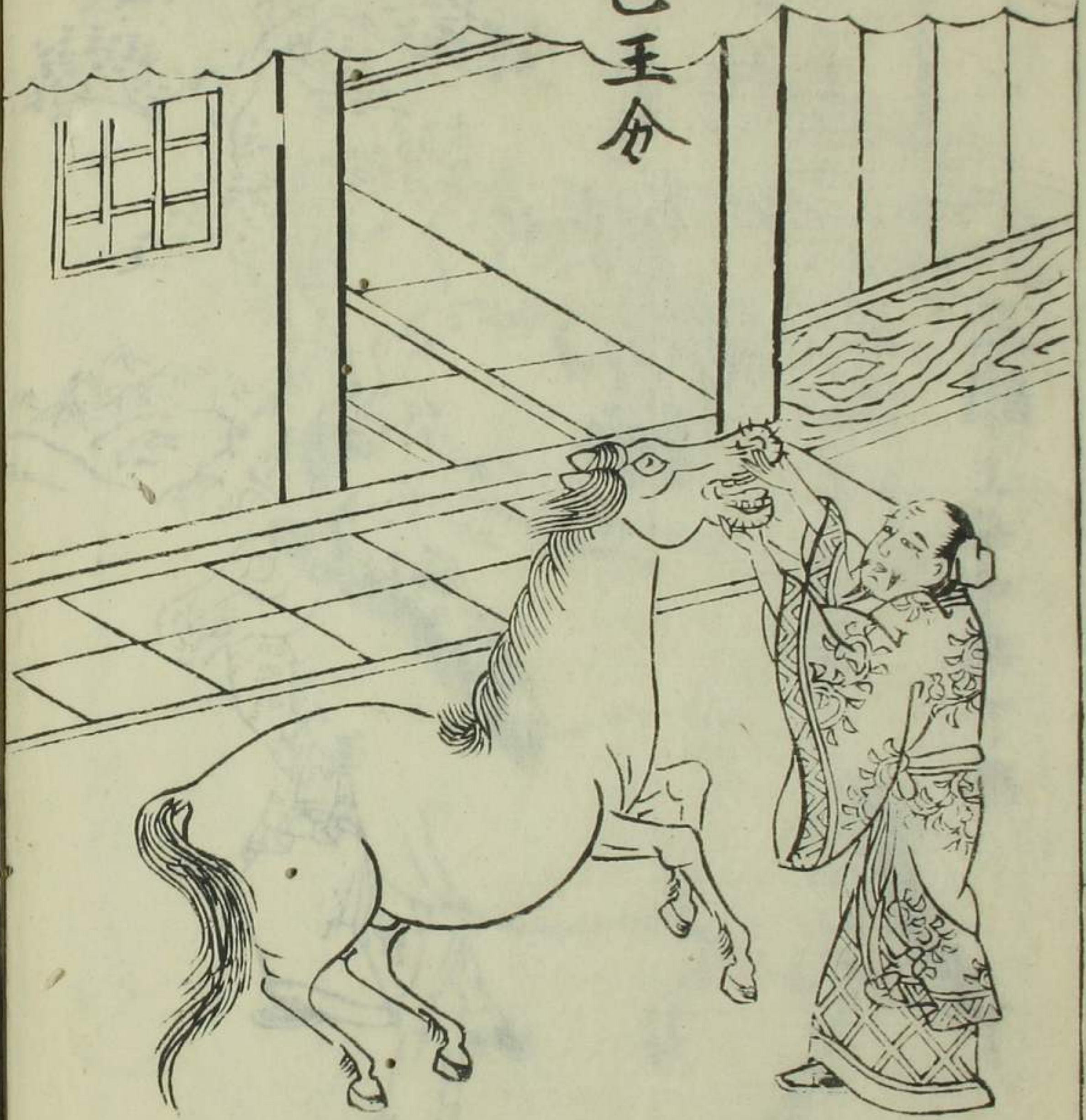
より来る。陽脈といひ。好より来る。陰脈







口色玉分



一 鼻脈とくしあそ呼吸の音とあそ病状知り  
半たり又觀動の脈とくしあそ芭蕉毛乃  
多あそ脈を音とあそ病状知りありそ  
あそ後わりしゆりそ又觀動の脈とくしあそ  
そあり

一 上六脈下六脈とのあそわりそ病状知り

六陰ともり  
眼脈厥陰肝経  
胸膈小陰心経  
夜眼厥陰巻絡

六陽ともり  
肺脈大陽肺経  
同筋大陽小腸経  
膝脈陽明大腸経



























暗視の白濁を瀉と濁とべし。滅灸の易は回  
向を忌む。禍害を是れ給命と記せり

一 喜始く血成れりて灸とべし。秋を忌む  
針と刺して。藥は代りて。驢集は喜初

て。棄血如泥。之を季惜血如金と記す。注りて  
救血の濁を。秦穆公と伯余將軍の注りて

見ゆ。東漢曲川の代りて。血成濁を  
了。厚は強と薬し。灸は針ととりて

補注とんぐく。針と指とべし。駭を  
たうりやどく。好まらるるおとべし

はよ針を刺し。肉と指りて。灸は  
せむ。病骨とせむ。灸は半みればゆへ切

針刺針の濁り。補注の教あり。灸は  
今血注功あり。人の注りて。灸は

よ。灸は針と指りて。灸は  
人の教あり。遠ひる。灸は

灸の灸あり。灸は  
一 蹄小灸あり。灸は

灸は灸あり。灸は  
灸は灸あり。灸は

灸は灸あり。灸は



半あり。上六魚と出とゆへ。およ針して。  
 上焦の身は引上げ。三焦の機は代受するや  
 あり。回帰熱血のたりよへあつるや  
 あり。

一 痛切はわつらつる。醫の業。用はつる。れ  
 脈色の沈こまらあつるといふ。浮沈を  
 法法とよく。病根を切つる。あり  
 ころれ。地と。素病伸あし。云ふ。脈を切つ。秋  
 脚と。あつ。菜相。尚と。ね。め。勢。あり。が。ゆ。へ  
 ころ。ころ。あり。ま。わ。つ。る。人。は。唯。見。脈

形状とよく。ん。つ。ふ。べ。一。う。ま。心。あ。さ。ゆ。へ  
 を。契。し。表。の。辨。よ。わ。つ。り。一。そ。外。港。る。尿  
 後。出。版。あ。つ。そ。杉。の。代。あ。つ。る。り。の。あり。  
 後。と。ら。と。有。て。あ。つ。一。或。歎。勢。の。奇。は

かつ。し。な。れ。生。死。も。あ。つ。地。と。つ。り  
 佛。の。ろ。く。地。獄。あ。つ。り。れ

見。や。一。み。事。ま。ら。つ。る。と。さ。つ。ら。れ。と  
 どの。や。ま。ひ。あ。つ。と。あ。つ。て。せん。や  
 能。毒。と。知。し。ま。つ。拾。八。反。指。九。畏。と。そ。忘。お。そ  
 る。薬。あ。つ。一。ま。代。知。つ。れ。れ。加。味。あ。つ。り。



一 或人もの一ツ葉はちりて。即ちすくはる  
 秘方とて。由らば葉の病は解く  
 功あり。奇妙なる後あり。平はゆふ  
 身ひさしく。積葉と解して。治るべし。  
 源氏牡丹教。之を焼く。りを。焼く。と  
 七ヶ七夜焼く。之を。度毎。薬の汁と分て。六  
 焼七日の内。指に夜焼く。り。之を。後。く。く  
 物や。て。之。の。口。と。洗。ひ。た。の。葉。と。磨。付。上  
 ぐ。の。も。あ。そ。物。を。用。ひ。た。の。も。あ。く。ん。あ

一 消黄粉とて。是れ。く。汗。と。洗。を。と。治。ま。る  
 黄粉。く。ま。して。暮。日。暴。干。を。之。治。ま。る。く  
 消黄粉。く。ま。く。

消黄散

- |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 黄菁 | 貝母 | 知母 | 大黃 | 牡丹 |
| 黄芩 | 鬱金 | 耳草 | 石栝 | く  |
| 粉  | 石  | 合  | 蜜  | 煉  |
| 時  | 和  | て  | 用  | く  |



















十 夏の氣は福くんと。麻と涼くみく  
多はふ事可なり。冬を麻と暖かしく  
冷うる物は何事ありし

一 何事かきき大ききみことと。あいにくよく  
冷い。ちもとよりて何し。分海荒糖は  
どは何のや。泡洗はくく割らるゆあり。  
碧はつらく。細妙は肉あり。蒸は  
る蒸るはあつと書なり

一 大夏何事かきき。熱せして。生あく  
何人わりの。させふさるるの。いかに

中わりの。さす事と。あひひらうり。あひの  
たよりん。いありて。さすは物と。その  
る後大全かき。高はわりの。さす。あひの  
さす。いかに。

一 或人の。あひ肥と。小秘事あり。いかに  
瘦る。いかに。あひと。何事。さす。あひ  
さす。いかに。あひ。さす。あひ。さす  
何とは。いかに。飲水の。陰掛。さあつ。あひ  
さす。いかに。あひ。さす。いかに

十 一の。いかに。あひ。さす。いかに







一 此はよきものなり。又向元とれらる物き。長伸  
ざりしものなり。

一 或人乃りるを。馬十匹。家さうらう。又  
るの故し。うか事あり。そるると一代あて  
あふ中。と。類と絶の理わりて。馬さ  
よに道は者中あり

右又乃きき。唯志。あ。ま。あ。せ。志の乃の  
西に連るものあり。功老。あ。あ。人。を。勝  
と。う。も。相。ひ。物。あ。く。あ。い。べ。ら。ね。も。法

らり。海。さ。よ。う。ら。れ。理。は。あ。あ。め。め。時。と  
あ。い。ま。の。運。行。は。さ。う。り。一。磁。石。の。あ。い。と  
方。角。ひ。あ。う。り。あ。い。と。は。書。し。又。迷。案。の  
あ。う。り。あ。あ。あ。り。又。案。の。さ。う。り。と。と  
あ。う。ん。の。あ。う。あ。れ。と。あ。い。と。よ。う。り  
て。大。呼。中。流。乃。術。あ。せ。り。と。あ。り。夫  
比。遠。は。漏。し。一。句。句。あ。い。と。と。あ。り。あ。あ。一  
費。回。の。も。思。あ。い。と。と。あ。り。あ。あ。の。法。を。  
法。の。細。砂。の。と。と。あ。り。常。又。よ。南。並。形。を  
乃。随。糸。相。叙。し。後。あ。う。の。法。勢。あ。い。と。針

武馬考之二

二二五



負業法礼<sup>り</sup>に<sup>て</sup>競馬<sup>を</sup>流<sup>し</sup>編<sup>り</sup>す<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 遊<sup>び</sup>の<sup>に</sup>遊<sup>び</sup>の<sup>に</sup>遊<sup>び</sup>の<sup>に</sup>遊<sup>び</sup>の<sup>に</sup>遊<sup>び</sup>の<sup>に</sup>  
 得<sup>る</sup>念<sup>を</sup>忘<sup>れ</sup>ず<sup>に</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 撰<sup>り</sup>馬<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>遠<sup>く</sup>東<sup>へ</sup>川<sup>を</sup>流<sup>し</sup>見<sup>る</sup>に<sup>て</sup>此<sup>の</sup>法<sup>を</sup>  
 の<sup>に</sup>投<sup>げ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 甲<sup>の</sup>流<sup>の</sup>一<sup>の</sup>部<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>古<sup>の</sup>書<sup>の</sup>中<sup>に</sup>在<sup>る</sup>理<sup>の</sup>  
 此<sup>の</sup>に<sup>て</sup>わ<sup>る</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 暗<sup>く</sup>し<sup>て</sup>ふ<sup>く</sup>し<sup>て</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 好<sup>む</sup>の<sup>に</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>  
 ま<sup>に</sup>其<sup>の</sup>法<sup>を</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>に</sup>

當流之系傳

- 大坪武部太補廣秀
- 村上加賀守永幸
- 存藤備前守國忠
- 存藤安藝守好玄
- 存藤備後守忠玄
- 存藤存官頭辰遠
- 卅易住僧了慶坊
- 存藤來馬辰光
- 存藤主税定易

武馬卷之五

七六



享保貳酉年正月吉日

書林

日本橋通一町目

須原屋茂兵衛



